

デカチンセフレが婚約したらしいので別れを告げたら、手加減なしの執着愛撫で本命だと分からされた話
サンプル（一部抜粋）

「ゆず。」

私を覆い隠すように抱きしめる190cmを超える筋肉質な巨体。
相変わらず何もかも大きいな。

「仁くん、重い。」

私の軽口を適当に流し、キスをされる。

「ん…んっ…」

大きい口、長い舌…息ができないくらい、ぐちゅぐちゅと口の中を犯される。

「ん、あ、は…っ」

後頭部を大きな手でがっしりと掴み、私を押し倒しながら慣れた手つきでブラのホックを外しながら、身体をまさぐる。

「ゆず、もう乳首勃ってる。」

「…っ、いちいち言わなくて…いいよ…。」

「そう?」

くすつと笑いながら優しく服を脱がせ、じゆるじゆると乳首を吸う。

「んっ、ん…あ…」

顔を隠そうとした手首をぎゅっと握られ、ベッドへと押し付けられる。

この男はいつも…私がよがっているのを見たがる。

「は…あっ、あ…」

しつこく乳首を責められ、身体がびくびくと反応し始める。

「相変わらず敏感だな。」

他の女の子と比べてって意味なんだろう。きつと。

だって私達はただのセフレで、月に1, 2回会うだけの後腐れのない関係だから。仁くんは顔が整っていて、アレがデカイ。初めてみた時は、目が点になったな…。まあ、そういう男だから、とにかくモテる。

「仁くんってっちした！」

なんて言ってる知り合いも居るくらいだし、多分相当遊んでるんだろう。

でも別に…構わない。

私は大勢いる女の子の中の一人だから。

仁くんとのえっちは気持ちいいけど、それ以上でもそれ以下でもない。恋愛をするなら彼みたいに遊び人じゃなくて、誠実な人がいいし。

というかそもそも恋愛は、疲れる。良い記憶がない。

それなら：身体の不満だけをサクッと解決できるこの関係が楽でいい。

（中略）

仁くんと出会う前は：いったことなんて無かったのにな。

その頃のセックスがどんなにつまらない行為だったのか、私はもう思い出せない。仁くんが居なくなったら：この性欲と身体はどうなるんだろうな。

ふとそんな事が頭によぎるけど：別にいいか。と自己完結する。

そもそも仁くんとセフレになったのだって、酔ったノリだったし。

（中略）

「あの噂、聞いた？」

同僚は目を輝かせて、興奮した様子で私に話しかけてくる。

キーボードに置いた指をそつと離し、同僚の方へと向き直る。

「噂？」

「そう！取引先に勤める友達に聞いたんだけど…」

仁くん婚約したらしいよ！」

「婚約……？」

一瞬、頭が真っ白になる。

「そう。あの遊び人が、ついに一人に決めたんだよ！
大ニュースでしょw」

「……」

仁くんが…婚約…？

ああ…そうなんだ……。婚約…か…。

ぼーっとした頭で、衝撃的なニュースを反芻する。

「誰…と？」

「噂だと、社長の娘さんらしいよ。」

その子が仁くんを気に入って、社長パワーを使ったとか何とか……」

「…へえ……」

そっか。

まあ…そうだよね。

私達はただのセフレで、私は沢山いるセフレの中の一人で…
ただそれだけだったんだもんね。

もうこの関係も終わりにしなきゃ。

「ゆず、なんか顔色悪いけど大丈夫？

まさかショックだった？」

同僚が少し笑いながら顔を覗き込んでくる。

「まさか…。

ただ、驚いただけ。あの遊び人の婚約なんて…どうだっていいし。」

「そうだよねw

ゆずは恋愛とか興味なさそうだし。」

「…だね。」

理由は分からないけど、顔が引き攣って上手く笑えない。

(中略)

コンコン、ドンドン…

少しずつドアを叩く音が大きくなる。うるさい…。

「はあ…」

私は盛大にため息をついて、玄関に向かう。

一体誰なの。

物音を立てないようにドアスコープを覗く。

「ひっ…」

ただどその瞬間、思わず小さな悲鳴が漏れて、ドアにガタンと身体がぶつかってしまった。ドアスコップから見えたのは…こちら側を覗くように顔を近づけた仁くんの目だった。いつもの穏やかで優しい目とは違う。冷たく肝が冷えるような目…。

「…ゆず、開けて。」

ドンドンとドアを叩く音が止まる。

声がいつもより…低い…？まるで怒っているかのような声。

「なんで…来たの…」

ドアを挟んで言葉を返す。

ドア越しでもビリビリとした威圧感が、肌に突き刺さる。

「ゆずが来ないから心配したんだよ。」

「…っ、行くわけ…ないでしょ…」

「なんで？」

「なんでって…婚約したんでしょ。」

「……」

「もうセフレは終わり。」

二度と……仁くんとはシない。やりたいなら他の女の子を当たって。」

自分の言葉にズキズキと胸が痛む。

理由は……分からない。

「……ゆずの意見は分かった。

とりあえず開けて。忘れ物、あるから。」

「忘れ物……？」

「そう。」

何か……忘れたっけ……。

「次に仕事で会う時じゃだめなの……？」

「だめだから、わざわざ来たんだけど？」

淡々とした抑揚のない声……。ぞわぞわと背中に鳥肌が立つのを感じながらも、忘れ物を受け取るだけだし……と自分を説得してしまう。

普段から穏やかな仁くんが、強引に何かしてくるなんて考えられないし。

「……わかった。」

明らかにいつもとは違う声だったのに……私は完全に油断してしまっていた。だって仁くんはモテるから。

わざわざ私を襲うほど飢えている人じゃないし。

(中略)

「っ…だから…仁くんとは、もうシないってば……。」

顔を背けたまま、必死で言葉を紡ぐ。

「…そう。」

仁くんは低くそう言いながら私の首筋へと舌を這わせる。

くちゅっ…♡ぬち…っ…♡

舌が触れる時に鳴る音が、いやらしく淫らに玄関に響く。

「ん…っ、あ…っ」

今までこんな事をされた事はない…。初めての感覚に身体がびくんと縮こまる。

「やめ…て…っ」

「無理。」

仁くんは短くそう言うと、そのまま首を大きな口で甘噛みしてくる。

「は…あ、なに…して…っ」

噛んだ場所を舌で甘やかすように舐め、じゅっ…♡と吸う。

「あ…あ…っ、だめ…っ」

服で隠せない場所に痕がつけられていく。

噛んだり舐めたり吸ったり…上手く息が吸えない…。急所を執拗に責められているからなのか、仁くんが怖いからなのか…いつでも殺されてしまいそうな恐怖と背徳感、快感が私を襲う。

押さえつけられている手首がジンジンと甘く痛む。

「は…あつ、あつ…」

怖いのに…身体がぞくぞくする…。

押さえつけられていない方の手でそっと仁くんの肩を押す。

「痛い…よ…っ」

でもそんな小さな抵抗は、大きな仁くんには一切効かない。

首筋に這う舌は少しずつ上に上がってきて、耳をじゅるじゅると激しく吸い始める。

「ひああああ…っ、や…あ、あ…っ」

「俺が好きなのは、お前だけだ。」

(中略)

「まって…っ…」

「なんで？」

「まだシャワー浴びてない…。汗だっがかいてるし、汚いから…やだ…っ」

「…俺は気にしない。」

「私が気にするの…！」

「…うるさいな。もう我慢なんてできねーんだよ。」

乱暴な言葉と共に、じゆるじゆると強引にクリを吸われる。

「んぐ、あああつっ…」

片足を仁くんの肩に乗せて、スカートの裾を自分で持つて…まるで私が喜んで舐められているような構図に見えて、恥ずかしい。

なのに私の股に顔を突っ込む仁くんの顔から、長いまつ毛から目を逸らせない。

唇でクリを挟むように刺激し、長い舌でおまんこからクリまで、ぐじゅ…♡ぬちゅ…♡と激しい音を立てて、舐めとられていく…。

「あ、あ、あつ、んんっ、や…音やだ…っ」

「ゆずがおまんこぬるぬるにしているから、こんな音が鳴るんだよ。」

フツと軽く鼻で笑いながら、くちゅ♡ぐちゅっ♡じゆる…ぬちゅ♡と激しく音を立てられる。

「ふ…ぐ…ああつ、あ、あ、あああ…っ」

身体がガクガクと震えだし、顔をゆがめる。

「もう二度と、俺から離れられないように…」

俺がお前の事をどれだけ愛してるか…理解出来るまで徹底的に分かせてやる。」

（手加減なしの溺愛の全容は製品版にて）